（様式１）

「地域・企業等と連携したPISA型読解力向上事業研究指定校」実績報告書（１年次）

１　学校名等

学　校　名	宇治市立広野中学校			校長名	藤本　いずみ
研 究 主 題	自分の思いや考えを受け手の状態に応じて丁寧に伝えられる生徒の育成				
研究の目的	これからの変化が激しい社会では、認知能力だけでなく、学ぶ意思・意欲や学ぶ方法といった社会情動的スキル（非認知能力）を併せ持つことが大切である。 認知能力と非認知能力の一体的な育成には、認知能力、非認知能力それぞれを意識した取組を行うと同時に、自らの状態を認識・説明したり、受け手の状態を分析・確認しながら、自らの思いや考えを伝えたりしていく必要がある。また、高度な自己認識や現状分析には当然、それを言語化できる語彙力が必要であり、そのような意味においても、認知能力と非認知能力の一体的な育成は大切であると考えられる。 そこで、生徒自身の「～したい」という思いや「～になって欲しい」という感情を論理的な裏付けを持って説明する経験を通して、社会に出た際に、主体的な意思を持ち、かつ論理的な裏付けのある行動がとれる人材へとつなげていけるのではないかと考えている。				

学　　年	１年	２年	３年	特別支援	合　計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学　級　数	6	5	6	4	21	42
児童生徒数	211	195	218	16	640	

２　研究校の概要

（１）学校概要

宇治市の南部に位置し、学年６学級規模の生徒数640名の学校である。近隣には太陽が丘や宇治市植物公園等があり緑に囲まれた環境にある。

（２）生徒の状況

・まじめでコツコツ頑張る生徒が多い。
・自分の意見を発表したり、思いを伝えたりすることに苦手意識のある生徒が多い。
・テスト等の記述問題では、解答そのものをあきらめて無回答で提出する生徒が目立つ。

（３）学力の状況

・全国学力・学習状況調査や京都府学力診断テストの結果では、どの教科も全国・府平均程度ないしは少し下回る程度である。
・一方で、努力が成果に結びつかない生徒も一定数おり、得点分布のバラつきがみられる。
・質問紙調査の結果についても、概ね全国・府平均程度である。

３　主な研究活動

（１）各教科での授業改善（通年での活動）

各教科における専門性を基に、それぞれの教科で以下の３点について取組を行った。

・新学習指導要領への対応

本年度より新学習指導要領の完全実施に伴い、従来の４観点（国語のみ５観点）から３観点になったことにより、各教科で評価の仕方の検討を年間通して随時行った。特に従前

の「意欲・関心・態度」については、育成したい資質・能力が「学びに向かう力・人間性等」となり、各教科での評価の観点は「主体的に学習に取り組む態度」となったこと、また「学びに向かう力・人間性等」が「涵養」される能力と明記されたことになった。このことにより、より長期的な視野で生徒の資質・能力をはぐくむ視点が必要になる点、また、評価がいわゆる総括的評価に偏ることなく、生徒にとっては勿論、教員の指導改善に活かせるような、いわゆる形成的評価としての側面に留意しながら進めていった。

・各教科による課題解決型学習（ＰＢＬ）の要素を取り入れた改善

認知能力と社会情動的スキル（非認知能力）の一体的な育成のための一つの方策として課題解決型学習は有効であると考えられる。課題解決には、その前提に基本となる知識・技能が必要であり、それを活用して思考・判断し表現するという総合的な資質・能力が必要である。そこには当然、追及しようとする意志やその手法という部分も含まれる。

各教科の特性を踏まえて、単元やまとまりを意識して解決すべき問いを単元やまとまりの冒頭に提示して、その後の授業内容が解決に向けたステップになるように設定されていたり、最終の課題解決をレポートの形で課し、考えたことを論理的にまとめるように促したりしている教科もあった。

・個人の伸びの見える化を目指した改善

本校では京都府教育委員会より「新たな学力分析の在り方に係る調査研究」の調査研究校にも指定されているが、この調査は年に１度である。生徒が個人の伸びを実感できる場面としての活用が可能であるが、それと同時に普段の授業場面でも生徒個人が自らの成長を感じられる場面を設定することは非常に有効である。単元の最初に単元末の課題について予想を立てて、単元の終わりにその予想を検証するようにして個人内の考え方の変化を捉えさせる教科があった。また、実技教科においては作成する作品の様子を毎時間タブレットで撮影し、ポートフォリオのようにしたり、技能の上達を時系列で追えるようにしたりすることによって、生徒個々の学びや努力の成果を見える化するような事例も見られた。

（2） 総合的な学習の時間を軸にした取組

・１年生

１年生の宇治学（総合的な学習の時間）は防災をテーマとして取り組んでいる。本年度は、過去に宇治市内で起こった災害の記録を探す中で防災・減災意識を高めることを目的に行った。事前学習として宇治市内の過去の災害を調べた後、班ごとに宇治市内でのフィールドワークを行い、いわゆる「自然災害伝承碑」を探すことを通して、災害が起きた地域の様子を実際に体感することを目的とした。また、フィールドワーク後には、まとめ、発表を行った。

・２年生

＜きょうと明日へのチャレンジコンテスト（９月～１月）＞

京都府教育委員会主催の「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」への参加を通して、課題解決型学習に取り組んだ。株式会社丹後王国ブルワリーからの課題「(コロナ禍において）丹後地方の特徴を生かした地域活性策も含めて、多くの人が訪れるための方法とは」について取り組んだ。

課題の理解をする際に、生徒にとってなじみの少ない丹後地域についての理解を深める

必要があり、その部分に時間をかけたが、校外学習で現地を訪れることによって、書物やインターネットで調べた内容と、肌身で感じとることとの共通項や違いを体感することは大きな経験になった。ある地域の振興策を外の地域に住む人が考えるという経験は、自地域について考える際にも、他地域からどう見えるかというメタ的な視点をもつことができると考えられる。

＜高知県の中学校との交流（１２月・３月）＞

以前より交流している高知県の中学校、四万十町立大正中学校と Zoom による交流を行った。学年 10 名強の小さな学校であるが、２年生が国語科の取組として「高知県への修学旅行プランの紹介」をおこなうこととなり、本校の生徒に６月にアンケートを行った上で旅行プランを作成、プレゼンテーションを聞く機会を得た。

また、本校の今年度の英語科の年間目標は、「京都の魅力を英語で発信しよう！」というものであり、本校生徒が考えた京都の魅力を年度末には大正中学校の生徒に向けてプレゼンテーションをした。

・３年生

宇治市の地域活性化をテーマとした課題解決型学習に取り組んだ。宇治の魅力を発信するためのプレゼンテーションの作成に取り組んだ。

４　今年度の研究の成果と検証

（1）各教科での授業改善

本年度については、各教科での専門性を活かした授業改善を中心に取り組んだ。その中で、担当者の各教科の見方・考え方を踏まえた創意工夫が見られた。各教科での工夫は、年度末に教員に対してアンケートを実施し、教科を越えて校内での共有ができるように取り組んだ。

（2）総合的な学習の時間を軸にした取組

・１年生

１年生の総合的な学習の時間のテーマは「防災」である。テーマに沿って、避難所体験等も行い防災・減災の意識を高めた後のフィールドワークをおこなった。宇治市を６つの地域にわけ、学級ごとに分担を決めて調査をおこなったが、同じ宇治市内に在住していても、初めて行く場所であった生徒も多く、地図を見ながらの班別行動であった。

それぞれの班で事前に調べた災害発生地に行き、現状を調査すると同時に「自然災害伝承碑」を探し、その結果をまとめて他の学級と混合で作ったグループの中で発表した。

事前の防災の取組もあり、生徒は積極的に取り組んだ。発表内容については、調査の報告が主になっていたが、調査の段階で地図や表の読み取りをおこなったり、プレゼンテーションのスライド作成において視覚的に見やすい図表やイラストを活用した

りするなどの創意工夫がみられた。

・２年生

＜きょうと明日へのチャレンジコンテスト＞

課題解決型学習を進めていくために、「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」へ参加をし、「(コロナ禍において）丹後地方の特徴を生かした地域活性策も含めて、多くの人が訪れるための方法とは」という課題に取り組んだ。本校の総合的な学習の時間のカリキュラムでは３年生で「宇治市への提言」を行うことになっており、地域活性策を考える経験と共に、他地域を見る経験を通してメタ的な視点を持って自地域を捉えることに繋げたいと考えた。取組では実際に丹後王国と丹後地域も訪れ、現地の様子も体感し、これまであまり関係性の乏しい地域の課題を自分事として捉えたプレゼンテーションをおこなった。丹後地域を「知る」という部分で時間がかかり、取組の精度としては不十分な部分もあったが、地域を「知る」という経験や、そこで生活する人々からのお話を伺えたことは、地域と共にある人々の姿を考える良い機会になった。また、コンテストの参加は、代表を選ぶ過程も含めて生徒にとって良い経験になったと同時に、代表のグループは学年の代表としての喜びと自覚が芽生えた。

＜高知県の中学校との交流＞

四万十川に面する高知県、四万十町立大正中学校とプレゼンテーションを通じた交流をおこなった。ICT を活用し、大正中学校の生徒の発表をオンラインで視聴した。四万十町の自然に思いを馳せると同時に、相手校の生徒との交流から「是非、リアルで交流したい」との意見が多く聞けたことが印象的であった。伝える相手への思いがある状態での発表はより意欲持って取り組めると考えられるため、今後も継続していきたい。

・３年生

班毎に宇治市の魅力を発信するプレゼンテーションを考え完成はさせたが、新型コロナウイルス感染症による修学旅行等スケジュール変更によって、発表するまではいかなかった。

５　今年度の課題

課題解決型学習についてこれまで教員も経験がなく、到達点について手探りの状態であった。したがって、今年度については、各教科、総合的な学習の時間のいずれにおいても、それぞれの取組として行った。結果として、各教員の前向きな創意工夫が見られたが、来年度は、その上で共通点などを見出し、一貫した方向性を打ち出したい。

６　来年度の研究構想

今年度の教員の経験を基に、本校に合ったルーブリックの作成、活用をおこなうとともに、「新たな学力分析の在り方に係る調査研究」において経年の比較もできることから、本年度の教員の体感を裏付けていけるようにしたい。